

## 歴代誌第一18-21章「神殿のための場所」

### 本文

#### 1A 戦いによる平定 18-20

##### 1B 東西南北での勝利 18

##### 1C 敵の従属 1-13

##### 2C イスラエルへの正しい裁き 14-17

##### 2B サウルの敵との戦い 19

##### 1C 真実に対する裏切り 1-5

##### 2C 連合の挫折 6-19

##### 3B イスラエルの宿敵 20

##### 1C アモン人の従属 1-3

##### 2C ペリシテの巨人の敗北 4-8

#### 2A 罪の償い 21

##### 1B 高ぶりと破滅 1-13

##### 2B 主への犠牲 14-30

### 本文

歴代誌第一 18 章を開いてください。私たちは今、ダビデがエルサレムにて神への礼拝を行い始めたところを読んでいます。彼が全イスラエルの王となってから、神の箱を自分の町エルサレムに運ばせました。そして、祭司とレビ人にこの箱の前での奉仕を命じました。私たちは前回、その礼拝の奉仕に讃美の歌をうたうことが含まれる話を聞きました。天において神を礼拝している天使たちは、歌をもって礼拝しています。ダビデは、その天からの啓示を受けて新しい礼拝形式を取り入れました。

そしてダビデは、自分の宮殿は杉材で作られているのに、なぜ神の箱が天幕の中にあるのか？ 主のための建物を造らないといけないと思いました。けれども、主はダビデに、「お前がわたしのための家を造るのか？ いや、わたしがあなたのために家を造る」と言われました。その家とは王朝のこと、ダビデ家がイスラエルの王となり、究極的にはキリストがダビデの世継ぎの子から出て、神の国を治めることを約束されたのです。

#### 1A 戦いによる平定 18-20

そして次に、ダビデがイスラエル周辺の国々を制していく歴史を読んでいきます。この歴史は、

次の神の約束に基づいています。「わたしが、わたしの民イスラエルのために一つの場所を定め、民を住みつかせ、民がその所に住むなら、もはや民は恐れおののくことはない。不正な者たちも、初めのころのように、重ねて民を押さえつけることはない。(17:9)」

これまでイスラエルは、敵によって脅かされてきました。エジプトから出て荒野の旅を行い、そして約束の地に入ったものの、周辺にいる敵から絶えず攻撃を受けていました。けれども、主はダビデを立てられて、その敵にことごとく勝つようにしてくださいました。その戦いが完結すれば、主は平和をエルサレムから確立させることを約束なさっていたのです。私たちキリスト者も、戦いの生活であります。この戦いが終わり安住するときは、この地上から離れて天に入るとき、また主がこの地上に戻ってこられる時であります。

### 1B 東西南北での勝利 18

そこで私たちは、ダビデがイスラエルの敵を平定させていく中で、主が私たちにも勝利を与えてくださることを確認することができます。

### 1C 敵の従属 1-13

18:1 その後、ダビデはペリシテ人を打って、これを屈服させ、ガテとそれに属する村落をペリシテ人の手から奪った。

イスラエルにとって、ペリシテ人は長年の敵であります。士師記ではサムソンがペリシテ人と戦い、サムエル記ではサウルもダビデもずっとペリシテ人と戦っていました。前の学びで、ダビデが全イスラエルの王となったとき、レファイムの谷からペリシテ人がエルサレムに戦いを挑んだけれども、水が破れるように敵を破ってくださったという記述を読みました。このようにしてペリシテ人の手から神は救ってくださいましたが、けれども今は、むしろペリシテ人の町々に行き、彼らを屈服させています。防衛から攻勢に入りました。

18:2 彼がモアブを打ったとき、モアブはダビデのしもべとなり、みつぎものを納める者となった。

ペリシテ人はイスラエルの南西にいる敵でしたが、南東にはモアブがいてイスラエルを悩ませていました。今は、貢を取める者たち、しもべとなっています。

18:3 ダビデは、ツォバの王ハダデエゼルが、ユーフラテス河流域にその勢力を確保しようとして来たとき、ハマテに出て、彼を打った。18:4 ダビデは、彼から戦車一千、騎兵七千、歩兵二万を取った。ダビデは、その戦車全部の馬の足の筋を切った。ただし、戦車の馬百頭を残した。18:5 ダマスコのアラムが、ツォバの王ハダデエゼルを助けに来たが、ダビデはアラムの二万二千人を打った。18:6 ダビデはダマスコのアラムに守備隊を置いた。アラムはダビデのしもべとなり、みつぎも

のを納める者となった。こうして主は、ダビデの行く先々で、彼に勝利を与えられた。

イスラエルの北からの攻撃です。ユーフラテス川流域からの攻撃ですが、ユーフラテス川は、主がアブラハムに与えられた約束の境界としてとても重要なところです。エジプトの川からユーフラテス川までを、アブラハムの子孫に与えると神は誓われていました。

その時に、ツォバの馬の筋を切っていますが、それは主がイスラエルの王に対して、馬に頼ってはならないと言われた命令があったからでした(申命 17:16)。イスラエルの王は他の人間の王とは異なり、ただ主の御名に拠り頼むように呼ばれていたのです。私たちキリスト者も、この世の常識に拠り頼むのではなく、キリストの命令に拠り頼みます。

そしてアラム、またはシリヤが応援に来ましたがアラムもダビデは打ち倒し、ダマスコに守備隊を置くことになりました。これで北の領域をイスラエルの勢力圏内に取り込むことができました。

18:7 ダビデはハダデエゼルの家来たちの持っていた金の丸い小盾を奪い取り、エルサレムに持ち帰った。18:8 ダビデは、ハダデエゼルの町ティブハテとクンから、非常に多くの青銅を奪い取った。これを用いて、ソロモンは青銅の海や柱、および青銅の器を作った。18:9 ハマテの王トウは、ダビデがツォバの王ハダデエゼルの全軍勢を打ち破ったことを聞いた。18:10 そこで、その子ハドラムをダビデ王のもとにやって、安否を尋ねさせ、ダビデがハダデエゼルと戦ってこれを打ち破ったことについて、祝福のこぼれを述べさせた。ハダデエゼルがトウに戦いをいどんでいたからである。トウは金、銀、青銅のすべての器を贈り物とした。18:11 ダビデ王は、それをもまた、彼がすべての異邦の民、すなわちエドム、モアブ、アモン人、ペリシテ人、アマレクのところから運んで来た銀や金とともに、主に聖別してささげた。

歴代誌の著者は、ダビデが北の勢力に打ち勝っている時に、また、その他の国々を征服した時に、その分捕物の金銀や青銅を、将来の主の宮のために聖別してささげたことを強調しています。北の国で戦わなかった王がいて、ハマテの王トウです。彼は自分の敵をダビデが倒したので祝福の言葉を述べていますが、このような平和の結びつきであっても、金銀、青銅の贈り物によってダビデに自らを従わせる姿勢を見せています。そしてダビデはこれをすべて主の宮のために捧げたのでした。私たちの生活は、キリストにあって、このように捧げられた生活となっているでしょうか？「そういうわけですから、兄弟たち。私は、神のあわれみのゆえに、あなたがたにお願いします。あなたがたのからだを、神に受け入れられる、聖い、生きた供え物としてささげなさい。それこそ、あなたがたの霊的な礼拝です。(ローマ 12:1)」

18:12 また、ツェルヤの子アブシャイは、塩の谷でエドム人一万八千を打ち殺した。18:13 彼はエドムに守備隊を置いた。こうして、エドムの全部がダビデのしもべとなった。このように主は、ダビ

デの行く先々で、彼に勝利を与えられた。

イスラエルの南、死海の南には、エドムという長年の敵がいました。けれども、ダビデが制しました。

そして、大事な言葉は「主は、ダビデの行く先々で、彼に勝利を与えられた」とあるところです。6節にも同じ言葉が書いてありました。実は、主は私たちキリスト者に同じ約束を与えておられます。「私たちがキリストの愛から引き離すのはだれですか。患難ですか、苦しみですか、迫害ですか、飢えですか、裸ですか、危険ですか、剣ですか。『あなたのために、私たちは一日中、死に定められている。私たちは、ほふられる羊とみなされた。』と書いてあるとおりです。しかし、私たちは、私たちが愛してくださった方によって、これらすべてのことの中にあっても、圧倒的な勝利者となるのです。(ローマ 8:35-37)」大事なものは、「これらすべてのことの中にあっても」であります。患難、苦しみ、迫害、飢え、危険の中にあっても、決してキリストにある神の愛から引き離されることはないという、圧倒的な勝利であるということです。ダビデが行く先々で勝利を収めたと同じように、私たちの行く先々で、キリストにある神の愛がますます深められ、広がっていく勝利を手にかけています。

#### 2C イスラエルへの正しい裁き 14-17

18:14 ダビデはイスラエルの全部を治め、その民のすべての者に正しいさばきを行なった。18:15 ツェルヤの子ヨアブは軍団長、アヒルデの子ヨシャパテは参議、18:16 アヒトブの子ツアドクとエブヤタルの子アビメレクは祭司、シャウシャは書記、18:17 エホヤダの子ベナヤはケレテ人とペレテ人の上に立つ者、ダビデの子らは王の側近の者であった。

周囲の敵を制することができましたが、今度はイスラエル国内を正しく治めることによって、そこに神の正義と平和が満ちることになります。民が周囲の敵からの圧迫を受けなくてよくなり、そして国内が安定して初めて安住できます。側近の名前が列挙されていますが、ヨアブについてのみ説明したいと思います。彼が次の 19 章と 20 章でアモン人との戦いで活躍し、21 章でダビデの人口調査の命令に対して、異議を唱えた人物として登場します。

#### 2B サウルの敵との戦い 19

##### 1C 真実に対する裏切り 1-5

19:1 この後、アモン人の王ナハシュが死に、その子が代わって王となった。19:2 ダビデは、「ナハシュの子ハヌンに真実を尽くそう。彼の父が私に真実を尽くしてくれたのだから」と考えた。そこで、ダビデは使者を送って、彼の父の悔やみを言わせた。ダビデの家来たちがハヌンに悔やみを言うため、彼のもと、アモン人の地に来たとき、19:3 アモン人のつかさたちは、ハヌンに言った。「ダビデがあなたのもとに悔やみの使者をよこしたからといって、彼が父君を敬っているとでもお考えですか。この地を調べ、くつがえし、探るために、彼の家来たちがあなたのところに来たのではありま

せんか。」19:4 そこでハヌンはダビデの家来たちを捕らえ、彼らのひげをそり落とし、その衣を半分に切って腰のあたりまでにし、彼らを送り返した。19:5 人々が来て、ダビデにこの人たちのことを告げたので、彼は彼らを迎えに人をやった。この人たちが非常に恥じていたからである。王は言った。「あなたがたのひげが伸びるまで、エリコにとどまり、それから帰りなさい。」

歴代誌の著者は、周囲の敵として最後まで抵抗したアモン人との戦いに焦点を合わせます。ここに出てくる「ナハシュ」というアモン人の王は、イスラエルに王が与えられた時、すなわちサウルが王となった時に戦った相手でありました。ナハシュが、ヤベシュ・ギルアデの人々を自分の僕にしようとした時に、神の御霊がサウルの上を下って、イスラエル人が勇敢にナハシュに戦いました(1サムエル 11 章参照)。したがって、イスラエルが王政を取ってから初めの周囲との戦いがアモン人から始まり、そしてその戦いを終結させるのもアモン人との戦いであることを記すためです。

ナハシュは、サウルの敵でありましたが、ダビデが真実を尽くそうと言っている訳は、おそらくダビデがサウルから逃げている時、ダビデの周囲に出来上がっていった軍隊に対して戦いを挑まないという姿勢をナハシュは貫いたためだと思われます。けれども、その子ハヌンはその精神を受け継がず、ダビデに挑発的行為を働きました。

## 2C 連合の挫折 6-19

19:6 アモン人は、自分たちがダビデの憎しみを買ったのを見て取った。そこでハヌンおよびアモン人は、銀一千タラントを送って、アラム・ナハライムとアラム・マアカとツォバとから戦車と騎兵を雇った。19:7 彼らは自分たちのもとに、戦車三万二千台とマアカの王とその軍勢を雇った。彼らは出て来て、メデバの前に陣を敷いた。アモン人も、彼らの町々から集まり、いくさに臨もうと出て来た。19:8 ダビデはこれを聞き、ヨアブと勇士たちの全軍を送った。19:9 アモン人は出て、町の入口に戦いの備えをした。共に来た王たちは、別に野にいた。19:10 ヨアブは、彼の前とうしろに戦いの前面があるのを見て、イスラエルの精鋭全員からさらに兵を選び、アラムに立ち向かう陣ぞなえをし、19:11 民の残りの者は彼の兄弟アブシャイの手に託して、アモン人に立ち向かう陣ぞなえをした。19:12 ヨアブは言った。「もし、アラムが私より強ければ、おまえが私を救ってくれ。もし、アモン人がおまえより強かったら、私がおまえを救おう。19:13 強くあれ。われわれの民のため、われわれの神の町々のために全力を尽くそう。主はみこころにかなうことをされる。」19:14 ヨアブと彼の部下の兵士たちが戦おうとしてアラムの前方に近づいたとき、アラムは彼の前から逃げた。19:15 アモン人はアラムが逃げるのを見て、彼らもまた、ヨアブの兄弟アブシャイの前から逃げて、町に入り込んだ。そこでヨアブはエルサレムに帰った。

午前礼拝で話しましたように、ダビデたちにとって、アモン人のアラムからの傭兵は不意打ちでした。アモン人の首都ラバから出てくる兵を倒せばよいと思っていたのに、実は前線がまた別のところでアラム人との間にもできていたことを知りました。それでヨアブがその場でできる最善の戦略を

立てて、すべてを主のゆえに戦うこと、またその結果を主に委ねる言葉を残して戦いました。主は、大きな勝利を与えてくださいました。

私たちは、戦う前にあきらめることがしばしばあります。自分にはできないという完璧主義が邪魔をすることが多いです。また全力を尽くさないで、いつまでも消極的な姿勢で信仰生活をしている場合もあります。主はご自分独りで戦うことができますが、私たちの志に働かれて、私たちを用いて事を行なわれたいと願っておられます。だから、全力を尽くし、主にゆだねるというヨアブの姿勢が私たちの取るべき姿です。

19:16 アラムは、自分たちがイスラエルに打ち負かされたのを見て、使いを送り、川向こうのアラムを連れ出した。ハダデエゼルの將軍ショファクが彼らを率いていた。19:17 このことがダビデに報告された。すると、彼は全イスラエルを集結し、ヨルダン川を渡って、彼らのほうに進み、彼らに向かって陣ぞなえをした。ダビデはアラムに立ち向かうために戦いの備えをした。彼らは彼と戦った。19:18 アラムがイスラエルの前から逃げたので、ダビデはアラムの戦車兵七千と歩兵四万をほふり、將軍ショファクを殺した。19:19 ハダデエゼルのしもべたちは、彼らがイスラエルに打ち負かされたのを見て、ダビデと和を講じ、彼のしもべとなった。アラムはそれからもう、アモン人を救おうと思わなかった。

アラム地方の王ハダデエゼルは、一度ダビデに負けているにも関わらず、事もあろうにアモン人の戦いに加勢することによって再び戦いに挑んできました。けれども、今度は徹底的な敗北に帰します。これによって、ようやくアラムはダビデのしもべとなりました。

### 3B イスラエルの宿敵 20

#### 1C アモン人の従属 1-3

20:1 年が改まり、王たちが出陣するころ、ヨアブは軍勢を率いてアモン人の地を荒らし、さらに進んで、ラバを包囲した。ダビデはエルサレムにとどまっていた。ヨアブはラバを打ち、これを破壊した。20:2 ダビデが、彼らの王の冠をその頭から取ったとき、それは金一タラントの重さがあり、それには宝石がはめ込まれているのがわかった。その冠はダビデの頭に置かれた。彼はまた、その町から非常に多くの分捕り物を持って来た。20:3 彼はその町の人々を連れて来て、石のこぎりや、鉄のつるはしや斧を使う仕事につかせた。ダビデはアモン人のすべての町々に対して、このようにした。こうして、ダビデと民のすべてはエルサレムに帰った。

「年が改まり」とありますが、これは春の時期になったことを表しています。当時のその地域の人々は、冬になると戦いを休止させていました。雨が多く降るので、土地がぬかるみ、戦いにならないからです。けれども春になりました。そこで、ヨアブがアモン人に対する最後の打撃を与えます。ラバを攻略し、その王のかぶっていた金の王冠をダビデに被らせ、そしてアモン人を奴隷の身にさ

せて完全に制圧することができました。このことによって、ダビデの国によく周囲の敵からの脅威がなくなりました。

そして指摘しなければいけないのは、1 節と 2 節の間に、サムエル記第二では、ダビデがバテ・シェバと寝て、その夫ウリヤを殺した罪を犯した話があることです。それはアラム人の町ラバを攻略する時に起こった出来事でありました。そしてウリヤは、その攻略戦でダビデの陰謀で前線に行かされてそこで敵の手によって殺されたのです。

なぜ、この話が出てこないのか？歴代誌の著者にとっては、これはすでに知られた話だからです。そして、歴代誌の著者にとっては、この書を記している強い意図がありました。それは、周囲の敵から守られ安住している民に、神がご自分の住まわれるところを定められた、つまりエルサレムに神殿を建てるその経緯を記さなければいけないからです。同じ出来事を、別の強調点から、別の視点から書き記している訳です。

#### 2C ペリシテの巨人の敗北 4-8

20:4 その後、ゲゼルでペリシテ人との戦いが起こり、そのとき、フシャ人シベカイは、ラファの子孫のひとりシパイを打ち殺した。こうして、彼らは征服された。20:5 またペリシテ人との戦いがあったとき、ヤイルの子エルハナンは、ガテ人ゴリヤテの兄弟ラフミを打ち殺した。ラフミの槍の柄は、機織りの巻き棒のようであった。20:6 さらに、ガテで戦いがあったとき、そこに、指が六本ずつ、二十四本ある背の高い男がいた。彼もまたラファの子孫であった。20:7 彼はイスラエルをそしたが、ダビデの兄弟シムアの子ヨナタンが彼を打ち殺した。20:8 これらはガテのラファの子孫で、ダビデとその家来たちの手にかかって倒れた。

本当に最後の最後の敵との戦いです。その戦いとは、ペリシテ人の中にいる巨人どもとの戦いです。ダビデの戦いが、ペリシテ人の巨人ゴリヤテとの戦いであったことを思い出してください。その兄弟がまだ生き残っていました。またその他の巨人もいました。彼らを、ダビデの部下が勇敢に戦い、打ち倒しました。このことによってサウルが倒れ死んだその敵、ペリシテ人を完全征服することができました。

いかがでしょうか、私たちキリスト者にはペリシテ人のような長年の宿敵がいます。そしてその宿敵によって、屈辱的な敗北も受けたことがあります。自分の肉の弱さのところに敵が攻め入って、それで負けてしまった経験があります。その戦いに対して、時間がかかるけれども打ち勝つことができる希望を、ダビデ軍の戦いは示しています。皆さんの持っている肉の弱さは、それぞれ違う分野にあるでしょう。けれども、弱さがあることは変わりません。ダビデと共におられた主は、同じ肉の姿を取られて、その肉において神の処罰を受けてくださいました。このことによって、私たちが御霊に導かれることが可能になり、御霊によって肉の行いを殺すことができます。もう一度立ちあが

って、勇敢に戦う必要があります。

## 2A 罪の償い 21

今日の学びは、実は 20 章までは前座と言ってよいかもしれません。21 章にある、姦淫と殺人の罪とは異なる、高ぶりという罪が、歴代誌の著者が焦点を当てているものであることを、次の箇所から知ります。

### 1B 高ぶりと破滅 1-13

21:1 ここに、サタンがイスラエルに逆らって立ち、ダビデを誘い込んで、イスラエルの人口を数えさせた。

主が、ダビデに敵に対して数々の勝利を与えてくださいました。ペリシテ、モアブ、エドム、そしてアラム、アモンに打ち勝つようにしてくださいました。この成功こそが、ダビデがサタンの誘いに引き入れた原因となりました。

一国の王が人口調査をすることは、その国民を自分の所有とするという意味合いがあります。専制君主の徴です。新約時代、ローマ皇帝が全世界に住民登録を課したときのことを思い出してください。妊娠して臨月であったマリヤでも、ヨセフの故郷ベツレヘムに連れていかなければいけないほど過酷なものでした。それは、皇帝のエゴを満たすだけのものであり、どれだけその住民が虐げられているかを物語っています。

神ご自身が、イスラエルの民に対して登録を命じられている掟があります。「あなたがイスラエル人の登録のため、人口調査をするとき、その登録にあたり、各人は自分自身の贖い金を【主】に納めなければならない。これは、彼らの登録によって、彼らにわざわいが起こらないためである。(出エジプト 30:12)」イスラエルの民は、主の所有であります。他の人間の国の支配者と異なり、その王は自分の民を自分のものとしているではありませんでした。ダビデ自身、「ダビデは、【主】が彼をイスラエルの王として堅く立て、主の民イスラエルのために、彼の王権がいよいよ盛んにされているのを知った。(14:2)」と、この民が主の民であることを確信していたのです。しかし、彼の心が高ぶり、この境界線を乗り越えました。

主はダビデのように、私たちを引き上げたいと願っておられます。ご自分のかたちにお造りになり、地上にあるものを支配するように意図しておられました。私たちは神の子供という特権が与えられていたのです。しかし、その引き上げがあくまでも、自分が神のもの、神に服従しているもの、神の所有、そして神に完全に依拠しているからこそその地位であって、神から独立するものではありません。人ではありませんが、悪魔が天において最高級の位にいる天使でありました。ゆえに、その栄光と美に酔いしれて、そしていと高き方のようになろうと高ぶったのです。そのために、彼は



天にある地位から落とされました。そして、人に対してもエバに、自分と同じ定めになるように、神のように賢くなれると言って惑わしたのです。

ある人の話ですが、その友人が伝道者になりました。自分の町の近くで大きな伝道集會が開かれるので招かれました。伝道者は力強い福音説教をして、多くの人が前に出て決心をしました。たくさんの人が列を作って彼に祈ってもらえるよう並んでいました。彼の友人である自分もそこに並んでいたそうです。そして、ようやく自分の番に来た時に、彼がこう言ったそうです。「そんなに悪くなかったでしょ？」つまり、自分は結構うまくできたでしょ？という意味です。この時に、自分はものすごい嫌悪感が出て、醜さを感じたとのことです。主がこの伝道者を大いに用いられました。その栄光をその伝道者は少しだけいいでしょ？という感じで、自分のものとして味わっていたのです。

ところで、ダビデを誘い込んだのはサタンであるとありますが、同じ話がサムエル記第二 24 章に載っていて、そこでは主ご自身が、ダビデに人口を数えよと言われたとあります。「さて、再び主の怒りが、イスラエルに向かって燃え上がった。主は「さあ、イスラエルとユダの人口を数えよ」と言って、ダビデを動かして彼らに向かわせた。(1 節)」これは矛盾しません。ダビデがサタンの誘いに引き込まれました。サタンは、ダビデの肉、すなわち自慢したいという肉を刺激して、人口調査をするように引き込みました。そしてダビデは、これを絶対にすると決めてしまいました。そこで主は憤られました。主は、決して人の自由意思を犯してまで無理強いさせる方ではありません。そこで、「ならば、やってみなさい。」と語られるのです。そして、その罪を行なわせるに任せて、それから自分のしたことを分からせるために、ご自分の怒りを示されます。

呪い師バラムがそうでした。モアブ人の王バラクが、イスラエルを呪ってほしいと頼んだ時に、彼は主から、「呪ってはならない。彼のところに行ってはならない。」と語られました。けれども、たくさんの金銀を見せられました。報酬金です。それで再び祈ったら、「行きなさい」と言われました。けれども主は怒りを燃やされ、主の使いが抜き身の剣を持って道に立ちふさがり、彼を殺そうとして待っていたのです。主が、「行きなさい」と言われたのは、バラムが貪りの心を起こして、どうしても行くと決めていたからです。

21:2 ダビデはヨアブと民のつかさたちに言った。「さあ、ベエル・シェバからダンに至るまでのイスラエルを数えなさい。そして、その人数を私に報告して、知らせてほしい。」21:3 すると、ヨアブは言った。「【主】が、御民を今より百倍も増してくださいますように。王さま。彼らはみな、わが君のもの、そのしもべではないのでしょうか。なぜ、わが君はこんなことを要求なさるのですか。なぜ、イスラエルに対し罪過ある者となられるのですか。」21:4 王はヨアブを説き伏せた。そこでヨアブは出て行って、イスラエルをあまねく行き巡り、エルサレムに帰って来た。21:5 そして、ヨアブは民の登録人数をダビデに報告した。全イスラエルには剣を使う者が百十万人、ユダには剣を使う者が四十七万人であった。21:6 彼はレビとベニヤミンとを、その中に登録しなかった。ヨアブは王の命

令を忌みきらったからである。

人口調査は、ベエル・シェバからダンに至るまで、すなわちイスラエル全土です。そしてヨアブが、ダビデの要求に対して、間違っているとまっすぐに進言しています。「御民を今より百倍も増してくださいように。」と言っていますが、そのとおりです、主はアブラハムに子孫を星の数のように、砂のように増やすと約束してくださいました。

そしてヨアブは王の要求ですから、イスラエルをあま巡りますが、レビとベニヤミンは登録しませんでした。「ヨアブは王の命令を忌みきらった」とありますが、レビはその分け前が主ご自身であり、主のものとなっている奉仕者です。神の奉仕者となっている者たちまでも奉仕者とするのか、という憤りがあったのでしょう。そしてベニヤミンは、サウルの出身です。サウルから王権を取ってダビデ家に渡したのはまさしく、主ご自身です。それをあたかも、ダビデが掌握しているかのように登録させるのにも、嫌悪感を抱いていました。ヨアブは王の要求に応えましたが、彼なりの細やかな不服を立てたのです。

21:7 この命令で、王は神のみこころをそこなった。神はイスラエルを打たれた。21:8 そこで、ダビデは神に言った。「私は、このようなことをして、大きな罪を犯しました。今、あなたのしもべの咎を見のがしてください。私はほんとうに愚かなことをしました。」

ダビデがなぜ、神のみこころにかなった人と呼ばれたのか？ダビデについて多くの人が、その失敗や過ちについて批判します。しかし、神は、ご自分の心になかった人とみなしておられました。神の見方と人の見方の違いは何だったのでしょうか？それは、「神の恵み深さ」です。神は、人が初めから悪に傾いていることを知っておられました。だから、神は彼らの義ではなく、ご自分の義によって彼らを救おうと決めておられました。その神の慈しみにどれだけ敏感なのかが、神の評価につながっているのです。もちろん、罪を犯すことは神のみこころをそこなっています。けれども、神の心をそこなったことを、どれだけ自分が悔いて、悲しんでいるか？神のお考えになっていること、神の感じておられることにどれだけ自分も考えて、感じているのか？が、大事なのです。

次、9 節に、預言者ガドがダビデのところへやってきます。ダビデは、預言者がやってくる前に、すでに罪の重さに気づき、そして自ら罪の告白をしています。かつてダビデは、バテ・シェバとの姦淫、そしてウリヤの殺人の罪を、預言者ナタンによって明らかにされました。けれども今は、預言者が来る前から自分で告白しています。ここに、彼の心が神のそれと一つになっていることが現れています。

そして姦淫の罪と、ここの高ぶりの罪を比べてみましょう。姦淫の罪はあまりにも明らかです。だれもがそれを嫌悪します。けれども、高ぶりはどうでしょうか？周りの人々には気づかれないうしよ

う。人口調査をしたところで、他の人々からその罪深さを指摘されることはありません。歴代誌の著者は、サムエル記の著者が記した姦淫と殺人の罪も悪いことだけれども、人に気づかれにくい高ぶりを特に問題視して、それであえてこの問題に注目したのだと思われます。

「高ぶりは破滅に先立ち、心の高慢は倒れに先立つ。(箴言 16:18)」と箴言にあります。人目には自分は良い人のように、思われているかもしれませんが、けれども、「これは私のものだ」と強く主張している、他の人々には決して寄せつけない、そして神のみことばでさえ跳ねつける強い意志はありますか？それを聖書は「高ぶり」と呼びます。

21:9 そこで、【主】はダビデの先見者ガドに告げて仰せられた。21:10 「行って、ダビデに告げて言え。『【主】はこう仰せられる。わたしがあなたに出す三つのことがある。そのうち一つを選べ。わたしはあなたのためにそれをしよう。』」21:11 ガドはダビデのもとに行き、彼に言った。「【主】はこう仰せられる。『受け入れよ。21:12 三年間のききんか。三か月間、あなたが仇の前で取り去られ、あなたに敵の剣が追い迫ることか。あるいは三日間、【主】の剣、疫病がこの地に及び、【主】の使いがイスラエルの国中を荒らすことか。』今、私を遣わされた方に何と答えたらよいかを決めてください。」21:13 ダビデはガドに言った。「それは私には非常につらいことです。私を【主】の手に陥らせてください。主のあわれみは深いからです。人の手には陥りたくありません。」

ここに、ダビデの深い、神への信頼を見ることができます。三つの選択肢があります。けれども、その二つは人が関わるものです。飢饉になれば、他の国々に頼らなければいけません。それから、敵の剣は、もちろんその敵の無慈悲な仕打ちが待っています。けれども、疫病であれば主ご自身の手によるものです。ダビデは、非常に辛いことだけれども、主の手に陥る中でも憐れみがあるだろう、と答えています。

皆さんは、神の怒りの中にもその憐れみがあることを信じることができるでしょうか？この方は正義の神だけれども、同時に憐れみに富んだ方です。だから、その怒りの中にも何らかの形で憐れみも含まれているのです。主はエジプトのパロに怒りを下しました。十の災いが下りました。一見、「なんと酷いことだろう、十も災いを下したのか。」と思います。けれども、そのように考えてはいけません。「十も悔い改めの機会を与えられたのか。」と考えるべきです。実は神は一瞬のうちに、パロを滅ぼすことができたのです。

## 2B 主への犠牲 14-30

21:14 すると、主はイスラエルに疫病を下されたので、イスラエルのうち七万の人が倒れた。21:15 神はエルサレムに御使いを遣わして、これを滅ぼそうとされた。主は御使いが滅ぼしているのをご覧になって、わざわいを下すことを思い直し、滅ぼしている御使いに仰せられた。「もう十分だ。あなたの手を引け。」主の使いは、エブス人オルナンの打ち場のかたわらに立っていた。

主の使いは、これまでも剣をもって神の怒りを実行した役を担ってきました。先ほど言及した、バラムに怒りを燃やした主の使いが、彼の行く道に立ちはだかつて、抜き身の剣を持っていました。そして、ヨシュアがエリコの町を一人で巡っている時に、主の軍の将としてヨシュアの前に現れました。けれども、主が思い直したので、御使いはそれ以上、イスラエル人が死ぬことはありませんでした。そのいきさつが、次に書いてあります。

21:16 ダビデは、目を上げたとき、主の使いが、抜き身の剣を手に持ち、それをエルサレムの上に差し伸べて、地と天の間に立っているのを見た。ダビデと長老たちは、荒布で身をおおい、ひれ伏した。21:17 ダビデは神に言った。「民を数えよと命じたのは私ではありませんか。罪を犯したのは、はなはだしい悪を行なったのは、この私です。この羊の群れがいったい何をしたというのでしょうか。わが神、主よ。どうか、あなたの御手を、私と私の一家に下してください。あなたの民は、疫病に渡さないでください。」

ダビデが人口調査をして、失ったものはイスラエル人自身でした。彼には、羊飼いととしての心がイスラエル人に対してありました。彼らを養い、彼らを導き、彼らを守る心がありました。正気に戻ったダビデは、自分が行っていた人口調査がいかにも彼らを苦しめることになったかを悟ったのです。私たちに、神が与えてくださった大切なものがあります。私たちは、自分の勝手な欲で、これらの大切な人々を失ったりしてはいないでしょうか。

21:18 すると、主の使いはガドに、ダビデに言うようにと言った。「ダビデは上って行って、エブス人オルナンの打ち場に、主のために祭壇を築かなければならない。」21:19 そこでダビデは、ガドが主の御名によって語ったことばに従って上って行った。

後に神殿の敷地になるこの打ち場は、主の使いが預言者ガドを通して指定したところでした。ここが、かつてアブラハムがイサクを捧げるように主が命じられたところであり、イサクを屠ろうとするアブラハムの手を止めたのは主の使いでありました。

21:20 オルナンが振り返ると御使いが見えた。彼とともにいた彼の四人の子は身を隠し、オルナンは小麦の打穀をしていた。

御使いの姿について、このように本人は見えても、その周りのものはその気配を感じて恐れて逃げるといことはよくありました。ダニエルがティグリス川を歩いていた時、主イエスご自身と思われる神の使いが現れて、彼だけはそれが主の使いであることが分かりましたが、他の連れの人々は幻を見なかったけれども、震え上がって逃げました(10:7)。

21:21 ダビデがオルナンのもとに行くと、オルナンは目を留めてダビデを見、打ち場から出て来て、地にひれ伏して、ダビデに礼をした。21:22 そこで、ダビデはオルナンに言った。「私に打ち場の地所を下さい。そこに主のために祭壇を建てたいのです。十分な金額で、それを私に下さい。神罰が民に及ばないようにするためです。」21:23 オルナンはダビデに言った。「王さま。どうぞ、お取りになってお気に召すようになさってください。ご覧ください。私は、全焼のいけにえのための牛、たきぎにできる打穀機、穀物のささげ物のための小麦を差上げます。すべてを差上げます。」21:24 しかし、ダビデ王はオルナンに言った。「いいえ、私はどうしても、十分な金額を払って買いたいのです。あなたのものを主にささげるわけにはいきません。費用もかけずに全焼のいけにえをささげたくないのです。」21:25 そしてダビデは、その地所代として、金のシェケルで重さ六百シェケルに当たるものを、オルナンに与えた。

ダビデは、犠牲のない礼拝は意味がないことを知っていました。形だけはいけにえを捧げても、自分に犠牲のないものであれば、それは礼拝ではありません。神はご自分の御子を捧げて私たちを救って下さいました。その犠牲こそが愛です。その愛に触れた人であれば、必ず、自分自身を生けるいけにえとして、主にお捧げしようという応答があります。もし、自分に余分があるときに捧げよう、残りのものを捧げようという態度を続けていけば、神の愛そのものが分からなくなってしまうことでしょう。

21:26 こうしてダビデは、そこに主のために祭壇を築き、全焼のいけにえと和解のいけにえとをささげて、主に呼ばわった。すると、主は全焼のいけにえの祭壇の上に天から火を下して、彼に答えられた。21:27 主が御使いに命じられたので、御使いは剣をさやに納めた。21:28 そのとき、ダビデは主がエブス人オルナンの打ち場で彼に答えられたのを見て、そこでいけにえをささげた。

火によって肉のいけにえを焼き尽くすのは、主ご自身がそのいけにえを受け入れられたということです。素晴らしいですね、主に受け入れられていることを知ることは。火によって答えてくださったので、今度ダビデは和解のいけにえをささげて、一部を主ご自身が、そして残りを自分自身が食べて交わりを回復したのでした。

21:29 モーセが荒野で造った主の幕屋と全焼のいけにえの祭壇は、その時、ギブオンの高き所にあった。21:30 ダビデは神を求めて、その前に出て行くことができなかった。主の使いの剣を恐れたからである。

覚えていますか、モーセに対して造れと命じられた主の幕屋は、約束の地に入ってからシロに、それからどこかの時点でギブオンに移っていました。神の箱はペリシテ人によって奪い取られて、それがイスラエル人に戻ってきて、それをエルサレムに持ってきたのがダビデです。けれども、青銅の祭壇、供えの机、燭台、香壇などは、ギブオンにある、モーセの時と同じように幕屋の中に置

かれて、そこでいけにえを捧げていました。しかし、ダビデは主の剣を恐れていました。主がいけにえを受け入れてくださった、ここエブス人オルナンの打ち場においてのみしか、自分が罰せられずに憐れみを受ける場所としては知らなかったのです。

そして実は、話はここで終わりません。後世の人が章と節を加えたのですが、実は 22 章 1 節は続きになっています。読んでみましょう。

22:1 そこで、ダビデは言った。「これこそ、神である【主】の宮だ。これこそ、イスラエルの全焼のいけにえの祭壇だ。」

ダビデは、主が約束してくださった「世継ぎの子がわたしのための家を建てる(17:12 参照)」という言葉が、まさにこの場所のことなのだ、と悟ったのです。そこで 22 章以降に、この場所に神殿を建てるべく、息子ソロモンのために神殿の材料を集めます。そして後にソロモンが、神殿奉献の祝いにおいて、その神殿を建てた主な目的が祈りが聞かれるためであること、祈りの中でも罪の赦しを中心であったのです。

この場所はアブラハムがイサクを捧げようとしたところです。また主イエス・キリストが十字架上でご自分をおささげになったゴルゴダに近いところです。ダビデは主の使いを恐れました。ここにしか、自分が救われる道はないことを強く感じました。同じように、私たちの救いもキリスト、そして十字架につけられたキリストのみにあるのです。そして、これが神の恵みです。神の恵みには、必ず神の裁きがあります。神が裁かれるところに、まさに台風の目のように、キリストの十字架という目があって、そこで溢れ流れるばかりの豊かな命を受けることができます。